

# 日本評論

大正十五年五月十一日第三種郵便物認可  
一九四八年三月一日發行(毎月一回一日發行)

〔今月の言葉〕 貧困の文化……………(1)

時のうごき

神々の怒り・資本家と戦争

一つの恋の物語・税吏と人民……………(2)

東京裁判の教訓……………**フランク・ホワイト**……………(20)

—日本の知識階級に寄す—〔特別寄稿〕

科学者の任務……………平田 寛……………(25)



炭礦地帯をゆく

(ルポルタージュ)……………(34)

—高萩から湯本まで—

3 月 號

座談會

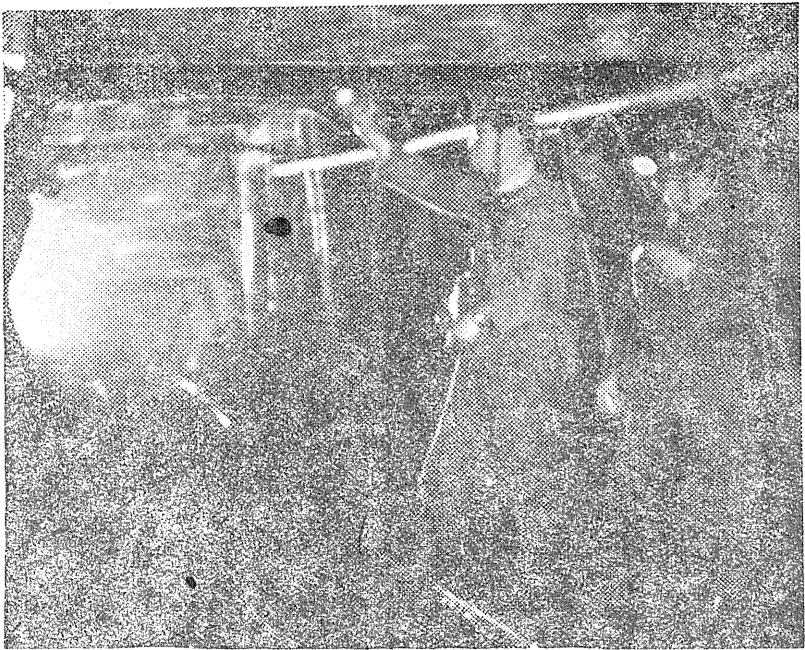
日本の地下政府

阿部眞之助・清水幾太郎  
岩淵辰雄・東本紀方……………(50)  
堀江正規・進藤次郎

ルネルタージュ

# 炭 礦 地 帯 を ゆ く

—— 高 萩 から 湯 本 ま で ——



( 写 眞 は 日 映 提 供 )

丸  
 ビルには高々と毎月の出炭グラフが掲げられ、増炭三、六〇〇万トンの目標がポスターに新聞にあふれ、さては毎週のラジオが特配物資にめぐまれてまどかな夢のような「炭坑の夕べ」を傳えている今日、かつて軍國主義日本のかわたれ時、

「……然れども、坑夫を使役するは益々残酷なるを以て、坑夫は復た別に一策を案出しことさらに喧嘩争闘をなして人を傷害し、或は村民の家に窃盜して官衙に訴えられ、懲役重禁錮に処せらんことを企てたり」

と、雜誌「日本人」(明治二十一年)にルボルタージュされた炭坑夫たちの生活は、いま民主主義日本の黎明に、どのようにルボルタージュされるべきであろうか。私たち日本評論特派員は、中小経営の典型である高萩炭礦北方坑を手はじめに、同じく秋山坑、最恵の條件にある大東炭礦、さらに福島縣に入つて天皇や水谷商相の視察で有名な湯本坑へと、「炭坑の條件」を追つていった。

常磐線高萩の町から一里、木枯しの中に電柱ばかり点々とつづく山道を、トラックが爆

音をたてて喰下つてゆく。山へ、炭坑へ——灰色の空の下にくろぐろと貯炭の山が浮びだすと、さすがに山いっぽいに溢れる生産の息吹きがぬかるみに錯綜するトラックの轍にも感じられるが、そのぬかるみを一時間近くも歩いて学校へ連う子供たちが鼻緒のきれた下駄をぶら下げた跣姿や、山の配給所に並んでいわしの特配を待つ納屋のおかみさん達のかごを手に手に私たちを見上げる腫のきびしさは、日本民主化はじまつて以來三年間の、美しいスローガンの氾濫が、誰を救い誰を救わなかったか、よく見ていってくれと言わんばかりに、切ない訴えを示していた。

### 切羽の息吹

#### 坑道

本線(炭車の通う幹線)の傾斜は十八度を超えるところと燃えるカンテラの焰に、浮びでる坑木はじつとりと水にしみ、不気味な微やきのこが生い茂っている。のしかかる百尺の岩盤の重みに、ぎしぎしときしみ、あるい

は、すでにがっさりと折れ下つて頭を打つ坑木、そればかりではないある坑のごときは、坑木のない全くの緊縛りが延々とつづいてさえるのだ。

あふれる水はどうとうと軌道をひたして急奔する。道とはいえ、道というに値しないこの道の、水と岩塊と濇と枕木に、地下足袋の足はつめたく痛い。

この「資本文明が産出した最も残忍でグロテスクな街路」(橋本英吉、炭坑)を、坑内夫たちは、道具を入れた麻袋を背に、就業時間より一時間も早く、カンテラの灯をたよりにとほとほと入坑する。ごーっと八輦の炭車が通りすぎる。坑木と坑木の間に体をかくして、わずかにトロッコをやりすごす時、ふつとカンテラが消えでもすれば、一寸先もみえない二千米の坑道は、ぼっくりと暗黒の中に彼を飲みこんでしまう。

もしそのような暗黒の中で、網のように左右にのびている延層坑道のどこかに、ちらと火のかが見えてもしたとするならば、それこそ昨年一月、同じ高萩の手綱坑で、九〇

間四方に燃えひろがり今なお炎々ともえつづけていたという、おそろしい自然発火なのだ。坑内の通氣がわるく、切羽に近ずくと風速〇・一メートルという、たばこの煙さえゆ

れない個所が多く、氣温は「鉱業警察法」の「作業所の温度は三〇度以下とす」などという規定もよそに、多くの坑が体温をさえ越す高温である。自然発火は、このような悪氣のこもった旧坑で、坑木や石炭のくさつたところから起り、落磐をともないつつ切羽から切羽へと拡がってゆく。これを防ぐには、保安係や経験をつんだ先山が、自然発火に先だって坑内をただよう、石油のような嗅氣をかきわけて歩く他に方法もないのだが、たとい嗅氣がしたところで、錯綜する坑道のどこから嗅うのかをかきあてる術もなく、戦争中濫掘をつづけた旧坑をあてどなくさまよう場合が多い。空氣を分析する装置はおろか、大東坑はもちろん中小経營の北方や秋山では寒暖計や測風器のそなえさえない。だから、法律できびしく定められている保安日誌の所定欄に書込まれるのも、三百六十五日「異狀なし」

の四字ばかりである。そしてもし「異常」があった日には、疑われるのは鉱山監督局でも生産管理者（坑長）でもなく、それは保安係や先山の嗅覚であり勘である。だからこそ坑内夫にとつて、落磐を予知しておびえ走る風の本能までが、かけがえない生命のパロメーターになる。坑内事務所の床の上に、点々と白い飯つぶをおとして、この風たちを大事にしている坑内夫をみると、それさえがざりざりの「科学的措置」なのだ。

このように「保安」される坑道を、朝な朝なとぼとぼと青白い体をはこび、夕ぐれにはまっ黒に自らを染め上げてかえってくる坑夫たちの、砲声なき火線「切羽」は、この坑道のどんすまりに、ぼっかりとなまなきしい炭層をのぞかして、鈍態に口ひらいているのである。

#### 先山・後山

「どうも発破の道火がしめつてこころる。今日も丸本かけて二本ねむった（不発のこと）。おっかなくて近よれね」

規定では一米なければならぬ導火線もこころはわずか一尺、点火から爆破まで三十秒というから、五・六本も点火している中には逃げる時間もなくなってしまう。私たちの会った何十人かの坑内夫の中、九死に一生をえたおそろしい経験を持たない人は僅かだった。

「山に一生いる氣もないが、結局喰えないからね」北方坑の先山、十六の年に坑内に入り七年目だという平田鶴夫君は、臍へ臍へと流れる炭塵にすすけた黒い汗を拭こうともしないでぼつぼつと話すのだった。先山の平田君と、その弟の後山と、もう一人の支柱夫が、ものも言わずに働いているこの切羽は、通氣がわるいためにカンテラの焰もゆれず、発破をかけたあとは一時間も二時間も火薬の煙と匂いがこもっている。拘束八時間、とは言え体むにしても弁当を喰うにしても、この中ですべてがなされねばならない。先山は、單につるはしを振うだけでなく、落磐や自然発火にそなえ、ガスの発生に注意し、発破をかける時は最も危険な点火をおこない、また時には支柱や運搬にも助力してつねに切羽のすみ

ずみから、掘進んでゆく次の炭層にまで心なくぼつていく。時々ガサツと、くずれる炭層に、瞬間さつとするどい目を注ぐのも先山であり、しばらくの休憩をまっ先に切上げて、つるはしを手には炭塵の中ですつくと立上るのも先山であった。

「かせぎかね？ 日に六カン(三トン)も出して月五千円くらいだかね。だが手拭やふんどしは配給がないし、地下足袋も二月に一つくらいはあってもみんな物(衝突のこと)すつからな。そう、地下足袋で四升、作業服の上だけで六升だな。……道具も、高くつくしね。」

炭 咄々と語る先山の眼は、年のわりに落込んで血走っており、一体に膨りの深い坑夫の顔だちは、カンテラの灯にてらされて、幾分羨望でさえある。やはり先山であった父親の後山になって入坑してから七年目、いまた先山として弟を仕込んでいる彼には、他にもこ

こで働いている三人の兄弟がある。こういう形で親子兄弟次々と坑内で一生をおくるのが炭坑夫の宿命なのだ。そこにはまた、先山・後山の請負制による、利益の分配という問題

もあって、自然先山・後山の関係は実の親子でなければ、益をかわした親分子分・兄貴分弟分ということが多い。

いま兄の掘出した炭塊を、そり箱と称する八分の一トン入りの木箱につめて、原始的なコロの上を、約五〇米ひきすつてトッコの通じている場所まで運んでいる弟の後山は、まだ見たところ二十になるかならないかの齡であろう。そり箱をひっぱるといふより、むしろぶら下るような姿で、せぐぐんだ尻から先に眞暗な坑道を後ずさつてゆく。

が、このような條件の職場にあって、坑夫に必要なのは頭脳と腕力だけではない。切羽までトロッコを通じるか、又はコンベアを入れさえすれば、当然不要となるこの原始的なそり箱までが、つい先月迄は後山の自弁で、会社は一個三十四位でこれを坑夫に賣っていたのだ。工具の大部分はいまなお自分持であり、しかも高萩の町まで一里あまりを買いにでて、ヤミ値でもとめたつるはしや斧をかついでまた歩いて山へかえるのだ。

「プチブルでなくちゃ、炭坑には来られねえ」

と、ある先山は語っていた。しかも、かつてはダイナマイトまでが自弁であったことを知る人たちにとっては、カンテラやカーバイトを会社の半額負担にした今日まで、坑内夫のたたかいたつてきた成果は、涙ぐましい歴史を意味している。

だが、われわれが見たものは、先山・後山たちが、やがては炭坑特有のよろけや神経痛に陥入るまでのその日ぐらし的な仕事の仕ぶりや、ないしは請負賃金をいかにかせぎとるかというだけの要領のよい荒稼ぎばかりではなかつた。物交までして食いつないでゆく生計のなから、より良い工具を整え、より合理的に切羽をひらいてゆこうとする切ないばかりの生産への欲求が、「一生いる氣もないが——」という平田君のことばの中にさえ、うかがわれて録かつた。

だから七〇馬力の排水モーターを、一五〇馬力にする要求も、競争中の半分に減っている炭車を増して待時間をへらす運動も、切羽までコンベアかトロッコを通じさえすれば自分の一日三トンの出炭が必ず一日五トンには

上るといふ計算も、すべて坑内夫の自ずからなる生産意欲として表明されてきている。

そればかりではない、組合にたいして文化的な活動を、もっとも強く要求するのめやは坑内夫だと、北方組合の若い書記たちは語っていたし、組合の機関紙にも炭内夫の詩や歌が多い。「これかね？ いや、何でもないですよ」と平田君が

恥かしそうに、かくした両手の指輪までが、何をかもとめる切羽人たちの生態をしめしていたし、秋山の坑内で知りあつた二十三才の後山頼谷照夫君は、  
「親父に配給になつた地下足袋を弟や妹にまわして、親父はわらじで我慢する」と、樂でない生計をこぼしつつも、納屋

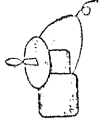



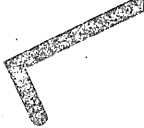
には三軒に一つ位しかないラジオをもつと聴きたい希望や、自立楽園で習っているヴァイオリンをもつと本格的にやりたいことなどを、臆を輝かして語るのだった。そして結局、そのあらゆる希望が、炭車さえもつとあれば、こんなに坑内の労働時間を延ばさなくてもすむんだ」という「切羽よこせ」「捲き

(モーター)よこせ」の要望に集約され、カントラのほかげから、「そうだ」「うんだ」という声々がおこるのだった。

納屋と飯場にて

内田さん一家

坑夫になるのにいくら要るか？

	カンテラ	マル公	140円(ヤミ)	300円)
	カーバイト	一貫	44 (〃	70 )
	スコップ		140 (〃	200 )
	マサカリ		80 (〃	300 )
(以上ハ半額会社負担ノ坑モアル)				
	セット		40	
	タガネ	三本	400	
	ツルハシ	矢先	月五本	200
	ノコギリ	二丁	300	
	クテガイ	四本	120	
	合計	マル公	1,464円	

註 1. 他ニ地下足袋、ふんどし、手ぬぐい等

現在ホトンド配給ナシ

註 2. ツルハシ250円マサカリノ柄50円等ヲ含メ

ヤミデ町ノ商人ヨリ買ウトマル公数倍ノ資本

ガイル

今日は内田さん一家の引越である。じめじめした山間のおふにそって、おしめをつらねた汚い納屋、便所が十六軒に一つしかない、雨溜りと鼠と銀蠅の糞から、先頃高台に新築された八・六・三疊三間もある木の目も香わしい社宅に移り住むのだ。十一人の家族が、唯一の財産として育てている豚の小屋も、奥山の百姓の好意で贈られた杉木と杉皮で、いま建築中だ。むらがる子供たちの焚火をかこむ顔も明るい。

だが一家が、襖籠的な坑夫一家として、ともかくも長屋から解放されて、この高台の家を興えられるまでには、いまはもうよろけと神経痛で、歩くのも大儀になった五十六才の誠之丞さんが、先山として大正四年に坑内に入ってから、三十余年二代にわたる苦難の毎日があった。

ことに昨年、長兄の誠さん(現後山)が、南支から復員してくるまで、今年二十三才のもと子さんと、二十二才の芳郎さんが、すでにほとんど仕事のできなかつた老父をたすけての苦闘がづづいてきた。

一九四五年四月三日午後一時ころ、三年前十七才で後山として入坑し、日本最初の女先山となった内田もと子さんは、同僚の千葉みや子さん(一九才)と一緒に、ひるめしを終って、まだ仕事ののこっている佐伯みつ江さん(二二才)の切羽に手傳いにいった。天ば(天井)の左側がきれいに四角に取れずに残っていたのである。もと子さんはそこへ、セツとタガネで発破の穴をあけ、しばらく前に係員から受取ったダイナマイトを仕かけた。が、道火(導火線)がしめついでどうしてもカンテラの火がうつらず、手間どっている時に、捲立てにトロッコが到着したので、三人はトロ押しに行き、そこで他の同僚に一袋のバクダンあられをもらって、戦争末期めったにないその御馳走を、三人の汚い手に分けあって腰を下した。二・三十分もたったたであらうか、三人はたべおわって腰を上げた。もう一度発破に火をつけようとしたもと子さんのカンテラは火が細くなつて心細かつた。

カンテラを手に立上つた。そして佐伯さんと内田さんは千葉さんに点火をまかせてすぐ後に立ってみていた。千葉さんはカンテラの火を二寸ほどにのぼし何度もつけていたがどうもつきがわるい。……と、ある瞬間、もと子さんは、ちらと道火のあたりに火をみたように感じて、「もうついたんじゃないか」と口にしたとたんに、不思議な恐ろしさに襲われて後を向いた。

「……あの時、どうして千葉さんをぐいと引張らなかつたのかと思うと、くやまれてなりません」と、いま、もと子さんは語るのだった。一心にカンテラをかざしていた千葉さんには、恐ろしい予感が背筋をはしらなかつたのであろう。

爆発はその瞬間におこつた。耳がキーンとして、わけが判らなくなつたと子さんが、気がついた時にはまっ暗なじまの中に、トクトクトクという不気味な音が断続してきこえているばかりであつた。「カンテラがひっくりかえつて水がこぼれているのかしらん」と、しばらくは身うごきも出来なかつたものと

内田さん一家家計簿より (1947年10月)

収 入		支 出	
内 田 誠 (28才)	坑内夫 7,600円(俸込)	② 米	665.44円 ヤミ 魚 (主ニイワシ) 1,601.00円
芳 郎 (22才)	〃 3,600 (〃)	麦	392.52 葉 類 草(5人分) 1,594.00
信 義 (19才)	〃 3,200 (〃)	芋	369.58 野 菜 910.00
も と 子 (23才)	組合書記 850 (〃)	酒	338.40 芋 200.00
内 職 収 入	桶つくり 820	味噌、醤油	177.20 も ち 米 200.00
	野菜うり 220	煙 草	43.00 豆 類 530.00
収入合計 16,290円		長靴二足	170.00 その他副食 347.00
税引残 約10,000円		刷 食	121.96 果 物 220.00
		その他食糧	68.00 家族小遣い 971.00
		カーバイト	99.00 子 供 靴 1,800.00
		工 具 類	39.70 毛 糸 2,250.00
		そ の 他	41.00 医療(虫下シ) 2,000.00
			そ の 他 463.50
		小 計	2,576.10
			小 計 13,086.50
支 出 合 計 15,662.60			

子さんは夢うつつの中で考えた。  
 が、ああそれは、鼻から上を吹きとばされて、即死した十九才の千葉みや子さんの死体からあふれ出る血潮の音だったのである。

死んだ千葉さんは三十年も山にくらして、老後を労務係の小使として送っている老人の娘であった。社葬が行われた。が、会社から特別に見舞金をもらったという話もきかない。

それから長い間靜のようになって、後山にかえてもらった内田もと子さんは、終戦後一九四六年九月まで坑内において、組合青年部副部長に推され、組合書記になって坑外にでた。

いま兄妹四人が山で働くこの一家は、家計からみてもおよそ秋山坑全体でも樂な部類に入るほうであろう。が、樂しい引越は、朝からはじめて午前十時ころにはもうすっかり終っていた。それ以上はもう荷物が無いのだ。見せてもらった家計簿は、上掲のように赤字であった。そしてその月の消費中、あとに残ったのは毛糸のシャツと子供の靴ばかりであ



る。

戦争中、日本最初の女先山として、「坑内一級」の待遇をうけていたもと子さんも、労働基準法が出てみれば「坑外三級」日給二八円の「保護坑夫」である。今は選炭などに廻されたもと女先山の同輩たちは給料のためにはもつと危険な仕事でもしたいと言ひあつていくという。だが、かつて短いシャツと一巾の腰まき姿が「主婦の友」の表紙にまでつたもと子さんは、その頃を顧みて「結局会社がいい宣傳になっただけです」と語るのだ。

引越もそろそろ終るころ、手傳いの納屋のおかみさんたちについてきた子供たちが、手にごぼうの煮たのをくいながら、私たちをかこんできた。しもやけの耳のまわりに、しらみの卵をいっぱいつけた子供たちの一人、村上つみ子ちゃん（四年生、兄は先山である）に学校の勉強は何が好きかとたずねると、

「算数と社会科。社会科って面白いよ。炭

坑のことをやる時にはね。坑長さんと、会社の労務係のところに行つて、色々なことを聞いて来るんだよ。今度は高萩の町さ行って、町長さんと警察へ行くんだよ。皆とつてもよく教えてくれつから。」

しかし、先生は会社の労務係にききに行けとはいつても、組合の事務所に行くことは教えないらしい。私たちが話しているすぐ隣りでは、一冊のマンガの本を赤ん坊をおぶつた二人の女の子がうばい合っている。高萩の町まで行かなければ本は買えないし、たまに賣りに来る本は町で買うより五円位高いから、買つてもらえないという。

「こんなうすいマンガの本が三五円すつからね。本持つている人に貸してくれてたのんでも、何かやんなければ、貸してくれないんだよ。」

お父さんが先山をして、お母さんが選炭をやっているという、五年生の鈴木愛子ちゃんは、こう言つていた。東京から本を送つて上げよう、と約束すると、とても喜んで

「お姉ちゃん、いつかえんの。どこへ手紙

出したらいい。銭送つかんね。」

学校への一里の道を少しも遠いと思つていないどころか、学校が一番面白い、日曜でも行きたい。という子供たちは、口々に、私はマンガの本がいい。私はそうじゃない方がいい。東京には、子供の読むきれいな本がたくさんあるだろう。あれ先生がいいっていったから、五冊位送つてよ。と呼んで目を輝かせていた。

### 旧い草袋

秋山坑に三つある飯場の一つ、鈴木飯場とよばれる三部屋の合宿部屋に、いま十一人の独身者が身を寄せている。飯場ということばは暗く旧い。寮という名に改めよという声もあるが、ここの組織はやはり寮ではない。飯場の主人鈴木七兵衛氏は、会社の労務係に藉をおき月給をもらつてはいるが、一方寄宿している十一人から一人一日二十五円（内、会社が五円負担）をとりたてて、自己の計算で飯場をいとなんでいるし、何人かの子分をもつこの部落の顔役でもある。つまり飯場は会

社の寮とも私宮の下宿屋ともつかない存在である。そしてそこには、かつて乃木飯場が〇〇人からの子分をしたがえて勢力をはっていた頃や、田部飯場のおやじが飯場でもうけて小炭坑を自営したりした昔ばなしの搾取と封建性が全くぬけきつてはいないという。

ラジオも新聞もない飯場の汚くふくらんだ壁の上に、何のたのしみもなく「女もいらねえや」とつぶやく若い坑夫たちが、ただごころとねそべって日を暮している。蒲團は飯場の設えついで、会社の所有物だそうだが、個人のつかう戸棚さえ與えられてはいない。「火の用心、火に御注意ねがいます」と、柏子木にまじって細々とした声が谷間をつたてくるのを、やや感傷的にきき入りながら、飯場の住人たちは爐をかこんで、こもこもこの飯場に流れつくまでの前歴を語ってくれたが、おどろいたことには、農家や町の工場からやってきたこの若い人たちの間に、やがては結婚して一軒の納屋をもらい飯場を出ようという氣力さえみえないことであった。ほんとうに「女もいらねえ」ほどに虚脱している

この老人じみた青年の一群は、われわれが炭坑の親分・子分のことを聞きだすと、薄暗い棚のあたりから、ものも言わずに一冊の印刷物をぬきだしてきて見せてくれた。

#### 取立條例

第一條 当山ニ於テ友子ニ出生爲シタル者ハ平素品行方正ニシテ能ク其親分ヲ父母ノ如ク敬ヒ貴クキハ勿論モ不遜ノ行爲アルベカラザル事

第二條 友子ノ本分トスベキ道義ヲ重ジ三年

三月十日間ハ如何ナル事情アルモ他ニ行キ其ノ義務ニ違背スベカラザル事(以下略)

「自坑夫。渡工夫聯合取立免狀」と称する立派な印刷物が、毎年旧正月とお盆の吉日をえらんで、「取立て」の儀式の上作製される。昭和二十二年一月一日附の「免狀」に記載される親分・子分の面附は秋山坑坑内夫約三百五十名中百余名、その末にもものしい「浪人立会人」「客人立会人」「元老立会人」「顔役立会人」「飯場立会人」(鈴木七兵衛の名もここにあり)等々の氏名が「常陸國住人何某」と

いった肩書で三十余人並べられる。かくて「榎分」の司会のもとに、天照大神・春日大明神・八幡大明神以下四十柱の神々に誓って親分となり子分に取立てられた「磐城國住人」や「下野國産」たちは、

右之者平素品行方正専心業務ニ勉勵ナルヲ以テ山中一同確認爲ル処トナリ茲ニ於テ今回坑夫ニ取立候ニ付自來滿参力年三月十日ノ御奉公ハ勿論交際ノ義務等ハ固ク相守ラセ候ニ付何卒諸國諸山諸礦山諸工事ニ廻リ寄り候節ハ御交際之程伏シテ奉願上候也

#### 謹言

昭和貳拾貳年壹月壹日

日本國諸國諸鉱山諸工事同盟友子御中

千鶴萬龜

という目録を與えられる。会社に雇用される組合に加入する以外に、さらに改めて「茲ニ今回坑夫ニ取立テ」られるという仕組は会社にとってもけしからぬ言分でありそうだが、この「取立て」の儀式には会社からも相当の祝酒が贈られる例になっているというし、組合の幹部たちの中にも、「元老」や「顔役」を

親や兄にもっている人たちも見うけられた。

だが又逆に見れば「元老立会人」と立てられる旧い顔役の家から、全炭の副議長が生れたり、「渡坑夫立会人」の息子が組合の青年部次長になったり、旧い革袋はいつしか新しい革袋と替えられてゆく。親分子分も次第に冠婚葬祭の個人的なつながりに退化し、次第に新しい酒は新しい革袋に満ちてゆく。無氣力にみえる飯場の「住人」たちも、かつてのストのスキヤップに使われたならずもの群ではなくなっている。「僕らも戦争中は親分子分に名を連ねていると警察ににらまれないで済んで妙な意味で便利だったが、いまはもうそういう意味での必要も、なくなりましたなあ」と、ある進歩的な労働者は笑っていた。

### 石炭廠の抜穴

#### 赤字の正体

The Daito coal mine Worker union と

素朴な字体で墨くろくろとかかれた看板。こ

こは大東炭礦労働組合事務所である。

「何しろ六尺の丸太がずぶずぶむぐる位、

水で坑内の地ぶくれ（地盤がゆるんで周囲の圧力から段々上にもり上ってくる）がするのでも、やっぱり捲き（モーター）やポンプが古物だからですよ。復員寮の若い副組合長山口幸雄君は、「一八〇〇円ベースではホーレン草も喰い、ない、ポバイのおっさんも音をあげる」かかれた壁のビラを頭の上しながら古物談義をしてくれた。

一五馬力と三〇馬力の人車捲きあげは中古、えらくでかい一三〇馬力の炭車捲きあげは、この間七五馬力を働たので、近くの東新炭礦からの借りもの。排水ポンプも一〇馬力、三〇馬力三台のうち二台、四〇馬力は借りもの、一〇〇馬力と一五〇馬力はこの間の水で故障。

「どぶねずみじゃあるまいし、あの水の中じゃはたらけませんね。その上生産のあがらないのを我々の責任にして、経営が赤字じゃ困るから、基準賃銀坑内一〇八円、坑外六五円以上の歩増制度をやめようというんです。それで嫌ならやめたらどうだ、といわんばか

り……。實際我々もねずみで落着を予想したり、石油の臭いで自然発火に氣づいたいたいの、ずいぶん原始的だとはおもいますが、もういまはそれどころじゃないですよ。生産をつづけるか、我々が働けなくなるか、二つ一つです。もっとも彼等にすれば、資材はないからこそ、ポンプもモーターも借りものなんだといっていれはすみますがね。」

とにかく資木家にしてみれば資材はない、資金はない、そのうえ赤字だといっている、やりくりはつく。復興金融庫からの赤字融資は、石炭生産奨励金、設備資金、住宅建設、修理費をふくめて昨年二月から現在までに一五〇億円から一六〇億円を炭坑につきこんでいる。これは総領の甚六にちかひ。

だが財布の底は初めから抜けている。高秋炭礦では、いい加減な見積をして新坑開発予算一億円を國庫に要求し、六〇〇万円はすでにおりた。

常盤炭礦では「物わりのよい代議士」を動員して、排水ポンプの設備費として四億円の勘定書をだしたが、みことにはねられた。

自分の金では水汲一つしない。

昭和十九年の秋、高萩炭礦で水害があった時、政府から「補償金二七万円ヲ受取りタルモ事實ハ約二万円ヲ要シタルモノニシテ大須賀種次郎氏ノ言ニ依レバ同氏ハ菊地社長ノ命ニ依リ特ニ災害並ニ復旧面ヲ粉飾工作シ該補償金ヲ入手」(高萩炭礦株式会社社理監査報告書)していた。これに味をしめた社長は、さる九月の水害を利用して排水のためとして國庫からひきだした金が二〇〇万円、がこの時排水に働いた人夫はわずか五―六人だった。その後人夫が金持になったという話をきかないから、やはりこの前と同じ手をつかって水ぶくれになったわけだ。山元の事務所には帳簿等一冊もなく、駅前の礦業所にも割あてられた金の処分の明細をしめす記録だけで、資金の出入をあきらかにする帳簿は一冊もない。それだから事業内容について何も知らぬ各坑は、社長の胸三寸で目茶苦茶に出炭競争、掠奪採炭をやらされ、鉄砲虫のように働かされていた。濫掘の結果はあきらか、前には二〇カ所もあった切羽が今では七カ所し

かない。

これでは石炭が出ないのはあたりまえだが、彼等にすればそんなことはどうでもよい。石炭が出ないということだけがみそなのだ。あんまり設備をよくして沢山出炭するようになると、設備に金はかかる、労働者には出炭しただけの割増は拂わなければならぬ。その上出炭がふえて割増以上になると赤字融資がなくなり、彼等にとっては命とりになる。

「炭礦の中には収入が十分でないところがあるようだ――目下炭價問題研究中である」(日本経済新聞一・二〇)とゴッチョーク石炭調整官は正しく指摘したが、この談話が情報ブローカーの口を傳わると、すぐ現地にひびいて、値上予想の貯炭が増加し、ないないに拍車がかゝる。その間にヤミ炭が流れる。

各坑―運輸部―日炭にくるまで一カ年一〇〇〇トンほどろんときえる(前掲報告書)。附近の工場では石炭の割当がないにもかかわらず煙突のけむりはあがっている。トラック一台位のヤミはヤミのうちへはいらないのかもしれない。

その上「原價見積ノ際モーター等ノ機械モ据付ノ場合ニ一度ニ消却シタリ」(前掲報告書)。「炭礦資材が毎月平均使用量以上にかいこまれ、金づまりにおちいつたり」(レポート二月号)というのも赤字へ入るのだから全くえらいことだ。

#### 社長さんとウイスキー

高萩炭礦秋山坑の組合事務所へいってお茶を御馳走になると、なかなか立派な茶碗がでる。書記長専用、書記局用、とみんなきれいに焼入れがしてある。ところが話によるとこの茶碗をもらうには一寸骨がおれて、模範坑夫や、出炭競争に成績のよかつたのが、拜受する代物なのだ。この茶碗を焼いているのが、千代田、櫛方、北方手綱の三坑に附属している窯業工場である。ここにつとめている労働者は約二八〇人で、全礦山の一五％にあたる。固定資産もほとんどふえている。もつともそのわけで、坑内の排水のために、地上の小川の河底をセメントでかためようと倉庫へゆくと何万袋とあつた奴がきれいにない。

すでに鑛業工場の大煙突に化けてしまったというわけ。そののこりは鑛業工場の倉庫にのみこまれ、倉庫のはめ板がはずれセメントがはみでていた。炭車不足を解決するために新車をつくらうとすると、配給の鉄鋼はこれまた鑛業工場の爐に化けていた。会社にしてみればこんなことがしれたところで大したことじゃない。これらの工場では炭坑ではたらない坑夫の家族を收容して、家計補助の一端に貢献させてやっているのだから、坑夫からとやかくいわれる筋合のものではないとしらもきれるといふものである。

こんな調子で高萩町の油化工場、木工場、近くの海岸に製塩工場がぞくぞく炭礦用資材と資金でできていく。菊地社長の觸手は茨城縣下の中小炭礦で彼の息のかかっていないのではないという位四方八方にのびている。

それでもまた氏の事業欲はあきたらず、近頃はアイデアル・ウイスキーに出資して重役の名をつらねているともいふし、全山の坑夫のために配給した陶器のあまりは、ただちに銀座のたつみ屋に並ぶという。陽の目もみな

いで流した坑夫のくろい汗は、いつしか市場へ市場へと、形を変え意味を変え山を下って利潤を追求してゆく。

それでも地軸はうごく

こんな悪条件のもとでも労働者の生産意欲はめざましい。

三〇〇人ばかりの、大東炭礦のことであつた。会社が賃銀を引下げようとしたので、組合が反対すると、町から土建業者田中組の人夫をかりあつめ、四〇人ばかりで、人車坑道をほらせた。そこで組合は、人夫の仕事がかわつたら早速かえすこと、坑夫の作業場へは立入らぬこと、人夫の労働強化で我々の賃銀を引下げぬこと等の申入れをおこなつたが、

会社ではきき入れない。ところが天罰できめん、素人人夫のかなしさで、支柱も坑木もろくすっぽ立てずにもぐらのまねで塗油をやつた結果、排水ポンプ座附近の断層がばれた(落弊すること)。鉄管はまがりポンプは排水を停止してしまつた。たちまち切羽は七カ所も埋没し、機械は水中にもぐり作業は完全に

ストップしてしまつた。会社側もあわてて組合に対し無条件で排水作業につけといつてきた。組合はそれ見たことかとおもつてはみた。やはり自分達の職場は大切なので、賃銀を何時もの通り拂うこと、今度の責任は会社にあること、を条件として排水作業につく事をこたえた。ところが会社ではそれさえ拒否した。ついに十二月廿八日、業務管理を断行し、一夜の中に不眠不休で仕繰(落弊)したあとの(仕末)をおこない、機械を水からあげ、鉄管をなおし、ポンプを修理した。

この事件のおかげで出炭は三カ月間平常の三分の一に減少してしまつた。会社にしてみれば人夫をつかつてやれば安上りと思つたのだろうが、見事大穴をあけてしまつた。

反動勢力が、強い労働組合をぶちこわそうとする手だてはこれだけではない。近在はもとより遠く福島あたりに集くうテキ屋とか不良をかりあつめ八月下旬、高萩炭礦をしゅうげきしてきた。炎天下のある日トラックにのつた八〇名あまりの暴力團はドスのみ、日本刀をしこみ、竹槍を手にして千代田坑をお

そつた。ところが馬鹿なことに礦業所のトラックにのつたものだから、運轉手に徐行運轉をされ、その間に山へ電話連絡があり、それとばかり、全山の坑夫は千代田坑へあつまつた。問道をかけ抜けるもの、山をこえるもの、トラックで暴力團のあとを追うもの、山ではサイレンをぶうぶうふきならし、スピーカーで氣勢をあげ敵をむかえうつた。何にしろ八〇名位の小勢のことなので、坑夫たちの手にしたこん棒であたまをたたかれ、とうとうおをいちらされてしまった。

この時以來増炭をするのに、もぐらや鉄砲虫の様に夢中に掘っているだけでは、絶対だめだということが組合員にはつきりした。組合員は五〇年も坑内に入っていた老人をつかまえて新坑をききだしたり、附近をあるきまわって露出している礦脈をさがしたり、ボーリングをした跡をみつけて礦脈をたしかめたりして切羽さへ開けば五〇年も採炭可能の常盤無煙炭をみつけた。

杉皮事件もこれと同じ筆法である。坑夫の家の屋根があまりにひどく、雨がふるとうとう

でなくてさえせまい家の中をかけまわらなければならぬので、会社へ補修をたのんだ。予想どおり杉皮はないからだめだといつてきた。そこで又山あるきがはじまった。農民にきくと社長の山、しかも立派な杉林がたしかにあった。早速これを指示して申入れすると杉をきる人がいないからやっぱりだめだという。それじゃ入坑をやめて杉皮はぎにいつて屋根をふこうと組合で決めた。そうすると会社はあわてて四、五日中に必ずトラックで杉皮はとどけるから心配しなくてもよいというわけになった。

「大体あるものはあるんですからしょうがありませんやね。組合が会社の労務係の出店みたいに賃銀の算定や配給物の世話ばかりやっていないで、会社の尻をたたいて少しでも生産をあげさせる爲の調査や資料をそなえてデマ宣傳をふきとばさなくちゃだめですね。」と、全炭の副議長をやめて、今は一支柱夫になった、川又秀雄氏は、薄い鉄板でつくった簡易ストープの前であぐらをかき、小さな空氣穴からみえる眞赤な火に視線をそそぎなが

ら靜かにむすんだ。若いころトロッコにはねられて受けた續の傷あとが、闘志をたたえたするどい眼の上にくく光っていた。

### 安本・会社・組合

炭労の牙城湯本へ

常盤線湯本駅におり立ったのは、もう夕暮れ迫るころだった。駅前の「常盤炭鉱株式會社就職案内所」という大きな札のかかった窓口で教えられた通り、温泉街の家並み越しに、黒々と聳えるボク山を目標にして、私たち一行は、すぐ近くの湯本坑に向つた。

戦争中、美術報國會に贈られた「黒ダイヤ戰士」の大きな像を左手にみながら、炭礦の神様である山犬をまつた神社の、りっぱな鳥居をくぐると、じきそこが炭礦労働組合同盟（略称炭労、いわゆる全石炭——全日本石炭産業労働組合と分裂状態にある）の中心勢力である常盤炭坑労働組合の事務所である。その昔は、事務所に使っていたのであろう。

ちよつと、どこかの村役場といった感じである。

赤々と燃えるストーヴの火にあたりながら、卓上電話の受話器から流れる声に耳を傾けてみる。

「モシ、モシ、組合ですか、石炭廳の長官と、安本……経済安定本部のことです、あそこ野田局長と、代議士が四人ばかり東京から來られるんですが、……この時にね、あなた達……組合の方です、ね、次のことを話していただきたいという、あちらの……ええ、政府の方の希望なんです。いいですか、……」

一、生産復興運動の提唱、二、同じく、生産復興運動の根本精神、……三、生産隘路の問題、これを経営者の立場と、労務者の立場と両方から述べてほしいのだそうです。それからですね、生産復興運動の地方機関を是非つくってもらいたいんです。……」

おそらく、会社の労務課あたりからの電話であろう。そういえば、ここには、かつて労働運動をやっていたが、その後、轉向して、戦時中は産報運動の中心になり、戦後も会社

側のブレインとして、對組合策動に活動している、Sという人物がいる。この組合の幹部に言わせると、あの方には、私達もずいぶんお世話になっているのだそうだ。

組合長の渡辺勝治氏は、坑内労働者出身であるが、昨年四月選挙に組合から推されて福島縣會議員に当選した人である。彼は、縣会において、労資を通じ、ただ一人の炭礦出身者であるそうだが、その立候補当時の模様を、組合常任書記のK氏は「あの時は会社も実によくやってくれました。選挙が公営にならないかぎり、やっぱりものをいうのは金ですから。と」言っていた。

渡辺さんの椅子のうしろには、組合の綱領がはってある。「我等は労働者たるの自覚に於て、自主的に團結し、経済的社会的地位の向上をはかり、民主主義的文化を推進し、もつて石炭産業の興隆に寄與し、恒久平和産業の実現を期す。」これを書いた大きな紙の端の方が、のりがかわいてはがれ、下から昭和拾八年という文字がみえている。多分、戦時中のこれに似た（字面では全く正反對の）増

炭調が何かの上に、そのままはりつけたものであろう。

#### 水谷商相と水風呂

「どうぞ、これに着更えてください。」スチームの通った、会社の事務所の一室に通されて、いよいよ坑内に入る準備である。

坑内帽、作業衣上下、ふんどし、タオル、地下足袋、懐中電燈にいたるまで、一つ一つ「來客用」とかき入れてある、新品同様のものを渡された。高嶽で私たちが坑内に入るのに、組合の幹部が自分の地下足袋をぬいで借してくれなければ、服装のととのわなかったのとは、なんとという違いであろう。それもその筈、昨年八月五日におこなわれた、天皇の「奥の細道」も、それより一カ月前六月三十日の水谷商相ふんどし視察も、みんなこの湯本坑で行われたのである。私たちはもうすっかり観念して会社の賓客になることにした。

今日のコースは、水谷商相が半年前に歩いたのと同じところであり、組合の書記長の言うところによると「視察に対して坑内夫が一

番なれている」ところであり、また、組合の常任書記〇氏の説によると「常盤でも一番條件がよくて、全然問題にならないところ」だそうである。

坑内事務所で、全員ふんどし一本になる。

切羽の温度、三七度、湿度、七〇%、もっとも條件の悪い時で、温度四二度、湿度一〇〇%になることがあるということだ。

丁度風呂に入った時の感じである。それでもふんどし一本でいると、休がてんで動かせないという程ではないので、かえって過労におちいりやすいという。切羽には通称「水箱」という、水風呂の設備がある。この三尺立方

#### 常盤炭坑の労働者数 (昨年度)

出炭量	死亡者数	死重傷者数
一万屯当	0.46人	0.88人
月平均出炭 十万吨当	46人	88人

この割合で行くと全国では

出炭量	死亡者数	死重傷者数
3000万吨	1380人	2640人

の木製の風呂にはパイプによって坑外から水がおくられており、坑夫達は気のむいた時にふんどしと地下足袋のまま入るのであるが、最初なれないうちは、余りに冷いので入るのをいやがるという。それでもこの水箱に入る

か、あるいは、パイプで送られて来る水を、頭からかぶって作業をつげない限り、赤まら」といって、日射病にかかったような状態(はなはだしい場合には、腹はふくれ上り、手足の関節が動かなくなる)にすぐなるので、大抵の坑夫は、八時間のうち三時間は、水箱の中にいる私たちは、この水箱に坑夫達と一緒につかりながら問答をこころみた。

一人の機械夫のおじいさんは、水箱のふちに腰をかけ、頭にぬれタオルをのせながら、私たちにこう話した。

「機械夫は、先山や後山のように、自分のすきな時に休むことができますでな……」

「この切羽のように水がでると、ポンプを高い方へ運び上げるために、八時間以上働かねばなりません。その上、これ、こんなパイプから熱湯がもれるので、それにも

氣を使わねばなりませんのじゃ。私たちがあ。被褥者なんだけど、素人より給料は安いし……」

会社の「礦務月報」(昭和二十三年十一月)によると、湯本坑における一人一カ月の平均賃額は、採炭夫、三、三八一円二九銭、機械夫、二、一一五円三七銭(いすれも男)となっている。その上、増炭報償金も、採炭夫一二〇円にたいして機械夫一一〇円、配給でも、採炭は特一級であるが、機械夫は二級であり、前者は地下足袋を三月に二足もらえるが、後者は、二月に一足しかもらえないという状態である。

これは、政府および会社が、採炭夫さえ優遇すれば、石炭の増産ができるという、突情無視の政策をとっているためであり、また一方では、故障の多い機械と取り組みながら、陰の力になって働いている機械夫の犠牲で、一番目立つ採炭夫を優遇して、彼等が労働者を優遇しているかのような体面をつくらせているということができる。

ふんどし一本になって、切羽にまで行った



水谷商相も一緒に歩いたという坑夫の話によると坑内事務所にもどった時には、一巡して来ただけで赤ましかけていたというから、おそらく坑夫と一緒に、水箱に入ることはしなかったであろう。

## ハモニカ長屋の聲

絶対禁煙の坑内からでて来て（ここは高萩とちがいがガス爆発の危険がある）、なによりも先ず一服というので、会社から給與されたタバコを、昭和二年から八年間、全坑内夫が節約して、建てたという労働自治会館では、最近ダンスが盛んである。ところが、ここでは坑夫が、職員連から蔑視され、除け者になられている。私たちのついた晩のパーティーでも、憤慨した一坑夫が、椅子をけたおしてでて来たと話していたし、たまに進歩的な劇團や楽団がよばれてくると、たちまち湯の町にはびこる興行ボスの手先がドスを懐にかけ合いに來るともきく。

十年も坑内に入ったことのない組合幹部、出炭予想高を全坑夫に投票させることが、組

合の生産復興斗争（しだ）だと思ひこんでいる組合幹部、——坑内の平組合員はこれらの幹部を「組合員」とよんでいる。「組合」というのはまるで親方ギルドのようなものにししか考えられていないのだ。

だが、だからといって組合幹部も、けして本来親方ではない。私たちが世話してくれた書記長の渡辺さんは、後山五年、先山二年を坑内でつとめ上げ、ハモニカ長屋と自嘲的によばれる坑夫住宅の第十八列目の奥から三軒目に住んでいる一介の青年労働者であり、同じ坑内に長く働いていた父親をガス爆発のためにうしなつた悲劇の子でさえもある。

全炭系・炭労系と「二つの世界」に分れてはいようと、ハモニカ長屋の現実、高萩・大東の納屋や飯場と「一つの世界」にちがいない。秋山の納屋で十六軒に一つの便所を、ここではまあ五軒に一つ位賜っているというのがせきの山、天井も壁も、破れたままに新聞紙をはりめぐらし、それをまた鼠にくわれてはつき張りてふさいで、雨漏をしのぎつつ月末の月給袋を待つのがハモニカ長屋の現実

なのだ。ところがこの月給袋が、毎日おかみさん達が購買組合で買う必需品の代金を一月ごとにきれいに清算の上渡されるので、昨年十一月のごときは突に、空袋をうけた者が五、二〇〇人もいたというのである。「一月も、まだはつきり数字はでていませんが、一万二千の月給袋の中六千は空袋でしょうね」と語りつつ、組合員の家計調査表のいくつかを見せてくれた組合書記も、おそらくその六千の空袋の一人なのか、ことばを飲んでストーブに眼をそらした。

「労組の出来なかつたころ、従業員に、長く医者にかかつているものがあれば、自治会より手当のような金をいただきたいと思ひますが、ああしたお金がまたいただける様になつたら、大分たすかると思ひますが……」

調査表の一枚には、このような訴えがまず鉛筆がきで書きつらねてあつた。北國の長い冬を越すハモニカ長屋の切ない悲願の聲である。

大正十五年五月十一日第三種郵便物認可  
 一九四八年三月一日發行每月一回二日發行

日本評論

三月號

第二十三卷 第三號

定價二十圓(送料五十錢)



鎮咳劑

本劑は新合成鎮咳劑で喘息・百日咳  
 其他一般咳嗽に著効を發揮す。

ハイスパ錠  
 Antibechnic NEU-SPA Tab

# 中耳炎、扁桃腺炎

炎症と化膿の迅速處置

コンムニンは細菌培養濾液によつて  
 血清の殺菌力を驚くほど強くし各種  
 炎症性・化膿性疾患を迅速に治療す  
 る世界的な新發見劑です。殊に微量の  
 皮下注射で効果を擧げ、大量廉價に  
 提供できる點等は大きな特長です。  
 皮下注射液 1cc 10 管 5 0 管



コンムニン  
 フジ



大阪・東京 藤澤藥品工業株式會社 福岡・札幌